

「賢い生前贈与」について

令和5年度の税制改正大綱で、贈与税と相続税のしくみが変わる方向が打ち出されたことは前回当コラムでお伝えしました。相続時精算課税制度でこれまで使えなかった110万円の非課税枠が使えるようになったことは驚きでした。

ここでもう一つ特筆すべきことは、相続時精算課税制度で使った非課税枠は、亡くなる前7年間の相続財産への加算から除外されるということです。一人当たり110万円×7年＝770万円の贈与が、相続財産に加算されない効果はそれなりに大きく、実際に試算してみると相続開始前10年程を目安に「暦年贈与」から「相続時精算課税制度」に切り替えた方が、財産を移転しつつ節税を図る効果が大きくなります。亡くなる10年前までは「暦年贈与」で多めの贈与を行い、その後は「相続時精算課税制度」の非課税枠110万円をこつこつと使っていくという考え方です。

無論、いつ相続が発生するかは誰にも分からないので、その10年前がいつなのかも分からず、この切り替え時期は「えいやっ」と決めてしまうしかないのでしょう。今後「賢い生前贈与」などと言って、同業者が上記のスキームを勧めることが予想されます。さしずめ「持ち戻し外しスキーム」などと呼ばれるのではないのでしょうか。

しかし、このスキームは少しでも早く高齢者世代から現役世代に財産を移転させ、なおかつ移転した財産の記録は納税者に任せるという財務省の思惑通りの行動です。そこには、本当の意味での豊かな老後を送る、という観点はすっぱりと抜け落ちています。その意味でも、「賢い生前贈与」の勧めは、財務官僚に「そう言わされている」という自覚を持つことが税理士には必要とされると思います。そして財務官僚の思惑通りにことが進むのならば、いつハシゴを外されてもおかしくないと警戒しなければならないとも思います。

■ 管理される生

それにしても、しみじみ思うのは、我々は死ぬべき時期もそこに向かう老後の生活のありようも、お上によって管理され、操作される時代に生きているということです。

そんなことを考えていると、「祝婚歌」などの温かな詩で知られる詩人の吉野弘が書いたひとつの美しい文章を思い出しました。

税務の話から大きくそれてしましますが、少しお付き合いください。

吉野弘は、自宅のある狭山市北入曾の自然を愛し『北入曾』という詩集を出しています。その中に「茶の花おぼえがき」という小文が収められていて、北入曾で茶畑を営む「若旦那」との会話が印象的です。

茶畑には豊富な肥料が施され、これによって美味しい茶葉が育つのですが、この栄養状態のいい茶の木には花がほとんど咲かないといえます。良好な環境に自足してしまって、

花を咲かせるなどという面倒くさいことは忘れてしまうのです。これは茶園経営にとってはむしろ好都合なことで、花が咲くにまかせておくと、茶木の栄養を大量に消費するため、葉に回るべき栄養が減ってしまうからです。

そのうえ、花が咲いて種ができて、それを育てるような栽培法では、せっかく交配で作った新種の品質を一定に保つことができません。そこで茶園は「取り木」と言って、挿し木とはほぼ同じ原理の繁殖法で、クローンを増やすのだそうです。

以下、詩人と「若旦那」との会話のくだりを引用します。

「随分、人間本位な木に作り変えられているわけです」若旦那は笑いながらそう言い、「茶畑では、茶の木がみんな栄養成長という状態に置かれている」とつけ加えてくれました。

外からの間断ない栄養攻め、その苦渋が、内部でいつのまにか安息とうたた寝に変わっているような、けだるい成長 — そんな状態を私は、栄養成長という言葉に感じました。で、私は聞きました。

「花を咲かせて種子をつくる、そういう、普通の成長は、何と云うのですか？」

「成熟成長、と云っています」

成熟が、死ぬことであったとは！ （「茶の花おぼえがき」『北入曾』所収）

■ 「栄養成長」というくびき

「栄養成長」を強いられる茶木と自分自身の生とを、多くの人が重ねあわせて考えるのではないのでしょうか。避けられない死、あるいは自らの個体としての限界を、何としてでも乗り越えてやろう。そういう命懸けの営みが、花を咲かせることだとしても、それは常に遠くに追いやられています。けだるい成長に慣れてしまって、間断ない栄養攻めが苦渋であった記憶は、意識の底に沈んでいるのです。

この小文は、次のように続きます。

その後、かなりの日を置いて、同じ若旦那から聞いた話に、こういうのがありました。

— 長い間、肥料を吸収しつづけた茶の木が老化して、もはや吸収力をも失ってしまったとき、一斉に花を咲き揃えます。

花とは何かを、これ以上鮮烈に語るができるでしょうか。

「あだ花」と本来なら呼ばれるであろうこの花が、どうしようもなく哀しく美しいものに映るのは、命懸けで生に向き合いたいという、われわれの思いに響くからだと思います。そして、管理された生への激しい反発が、一斉に咲きそろう花なのだすると、私もこの老木の花を思い浮かべながら、仕事をしようと思います。

（所長 瀬戸 英晴）